

語法・辞書の研究

八木克正

はじめに

2016年度は、優れた著作が数多く出た、実り豊かな年度であった。全10冊刊行予定の英語語法文法学会の叢書「シリーズ 英文法を解き明かす」(内田聖二・八木克正・安井泉(編), 研究社)の4冊をはじめ、開拓社「言語・文化叢書」の実証的研究の単行書も継続して出た。

「英文法を解き明かす」は、「学問的な関心が理論的側面に偏り、研究対象が文法の実証的記述から離れていった」(シリーズ各著書の冒頭の編者はしがき)ことに対応して設立された英語語法文法学会(1993～)の研究活動の総まとめとして、「ことばの基礎」「談話のことば」「ことばを彩る」「ことばとスコープ」「ことばの実際」という5つの視座からの研究成果を、単著書として継続的に出版する予定である。

2016年度の英語の実証的研究の成果を見ると、生成文法、認知言語学などの言語理論の延長として、語・フレーズや構文などの個々の現象を検証するという時期を経て、実証的研究と言語理論との統合の試みの時代に入ったように思える。特に、認知言語学の理論は伝統的な語法研究の考え方と共通する点が多く、これら二つの流れが理論と実践という関係になる可能性があるように思われる。

さて、7冊の単著書を読み進めながら、ひとつ気になることがある。いくつかの単著書に、「従来の学校文法では」「学習文法では」ということばがよく出てくる。この「学校文法」「学習文法」とは何を指しているのだろうか。検定教科書として英文法は存在しないし、これが学校(学習)文法であると言える具体的な文法書も存在しない。多様な学習参考書や受験参考書も記述内容はまちまちである。それとも、英語教員の頭の中にある「英文法」の知識なのだろうか。これは体系だっていないし、個人によって異なる。それとも、安井稔『英文法総覧』、江川泰一郎『英文法解説』、安藤貞雄『現代英文法講義』、宮川幸久・林龍次郎『アルファ英文法』のような記述的な文法書も含んでいるのであろうか。批判的議論を展開するためには、読者の便宜のためにも、具体的に書名と該当箇所を指摘して欲しいところである。

久しぶりに、辞書研究のエッセーと論文をまとめた論集が出た。また、辞書類の改訂の進展は緩やかになってきたが、古典的な日本の英和辞典の新版とイギリスの語法辞典2冊の改訂が出ている。

1. 論 文

『英語語法文法研究 第23号』（英語語法文法学会編，開拓社，2016.12.25）

今回は、シンポジウム「副詞を巡る諸問題：語法文法，辞書記述，談話，文体」で発表された論文4編と，一般論文7編が掲載された。奨励賞該当論文はない。

1.1 シンポジウム

1.1.1 滝沢直宏「-ly 副詞にみる副詞の多様性—語法・文法・パターン」 形容詞に -ly を付加して作られる -ly 副詞が現れるパターンをコーパスで検証している。freshly painted walls のような〈-ly 副詞＋過去分詞＋名詞〉，arguably the most critical のような〈-ly 副詞＋the＋最上級〉，and deservedly so のような〈and -ly 副詞＋so〉，vastly overestimated demand のような〈-ly 副詞＋over-/anti-＋名詞〉などのパターンを抽出し，そのパターンで生じる -ly 副詞を網羅する。また，このようなパターンがどのようなレジスターに偏在するかも検証している。

1.1.2 井上永幸^{ながゆき}「語法研究の要—副詞—コーパスを活用した辞書研究の立場から」 fall と become が従える補語の特徴と，fall と become が補語をとる場合に共起する副詞の種類を記述した。

1.1.3 都築雅子「in fact, actually, indeed, really の考察」 使い分けの難しいこれらの副詞的語句の用法の違いを文献やコーパスなどを使って検証した。それぞれに，認識文副詞，連結副詞，談話用法をもち，用法の重なりはあるが，使用域の違いなどで棲み分けがあるとす。

1.1.4 堀正広「小説における副詞研究の多様性」 近代小説の副詞は，通時的視点からみる使用頻度の変化，共起する動詞や前置詞の変化，作家ごとに好まれる副詞，作品内の人物描写に使われる副詞といった多様な側面から研究ができることをデータで示した。

1.2 論 文

1.2.1 阿戸昌彦^{あど}「名詞＋前置詞＋Whether 節—歴史的变化の視点を取り入れて」 We have solved *the problem (of) who* was at fault. のように，名詞句と wh-節の間の前置詞は任意であるとされることがある。一方，歴史的には前置詞は使わず，名詞句と wh-節の意味的関係の明確化のために挿入されるようになったという説がある。whether 節に限定して詳しく調べると，後者の説が正しいことが実証されたという。

1.2.2 河野継代^{こうのつぐよ}「関係詞の選択と限定修飾力」 関係詞としてのゼロ形，that, wh 形の順に限定力が強いと仮定すると，関係節を限定と修飾の2つではなく，中間的な「非制限的な制限節」が存在すること，固有名詞を先行詞とする制限節があること，疑似

関係節では *wh* 関係詞が使われること、数量詞先行詞には *wh* 関係詞が許されないことが説明できるという。

1.2.3 藏菌和也「起動動詞 *begin* と *start* に後続する *to* 不定詞及び動名詞補文の性質」*begin to V* が準備段階における段階的な変化を意味し、*start to V* は瞬間的な変化を意味する。したがって、*begin to V* は状態動詞と共起しやすく、*start to V* は状態動詞と共起しにくい。ただ、*begin* と *start* の意味の類似性から、統語的な融合性が見られるが、本来の独自性は維持していることが実証されるという。

1.2.4 関茂樹「不定詞節を含む叙述文の諸特性について」*be* の補語の位置に *to* 不定詞句が現れる叙述文の *That is for you to decide.* のタイプと *That is yours to decide.* のタイプの特性、統語特徴、構造の相違を論じている。両タイプとも文末の動詞の目的語空所化が起こっているのが特徴であるとする。

1.2.5 好田實「CAN SO の語法」古い英語で見られた *will do so* (とその類型) から *do* を省略した *will so* とは異なる用法で、‘*You can’t have your cake and eat it too.*’ ‘*Can so.*’ のような語法がある。一般化して言えば、操作詞の後に副詞の *so* が来て、「相手の否定的主張に反駁する発言に強調を加える」という。副詞としてのこの *so* の用法を分析している。

1.2.6 佐藤健児「条件文の帰結節における *be going to* に関する記述的研究」条件文の帰結節には *be going to* は使われないとされてきたが、事例は数多い。先行研究とデータをもとに、使われるための条件を3つにまとめた。

1.2.7 松原史典「“Ask a question of NP” 構文 vs. “Ask a question to NP” 構文」*ask her a question* が最も容認される形式であるが、目的語が *question* のような「疑問」の意味をもつ場合の *ask a question of him* の形は古風であるが容認される。これに代わって、*give a present to her* のような構文の影響か、*ask a question to him* の形が増加傾向にあるという。

2. 単 著 書

2.1 住吉誠『談話のこぼれ 2 規範からの解放』（「シリーズ 英文法を解き明かす」第4巻。研究社、2016.4.30）

日本の英学、英語学研究を歴史的に概観し、フレイジオロジー研究とは何かを論じる。第1部「本書の基本的な立場と考え方」と第2部「個別事例研究」からなる。第1部では、文法の規範性と記述性の歴史を明らかにする。英米の伝統文法の歴史の研究と日本の英学史、英語教育史の研究歴史を記述し、英米の動向と日本の動向が連続していることを示している。第2部は、近年台頭してきた、フレーズ化に関心をもつフレイジオロジーの立場から、一見規範に反するようなフレーズ化した現象、*have until X to V, on account of, not only but that, Don’t X me!, V X to please V, that*

節をとる動詞の拡大, notice 補文の実態, cannot bear の補文パターンについて, 詳細に論じている。

2.2 澤田茂保^{しげやす}『ことばの実際1 話しことばの構造』(「シリーズ 英文法を解き明かす」第9巻, 研究社, 2016.4.30)

話しことばにあって, 書きことばにない特性は, 「場面性」と「リアルタイム性」であるという前提で, 2章で「場面性・対面性」(状況省略, タグ表現, 場面に密着した定型表現, 強調), 3章で「リアルタイム性」(挿入, 繰り返し, 言い換えと言い直し, 構造の平板化・融合), 4章で「話しことばの流れとつながり」(名詞句前置, 話題化, 焦点前置, 転置)の分類のもとで具体的事例をあげている。

2.3 武田修一『教育英語意味論への誘い』(言語・文化選書 60, 開拓社, 2016.6.23)

文法は「表現と意味とを結び付けている仕組み」であり, 「英語表現が伝えている意味を理解したり, 意図した意味を伝えるための英語表現を組み立てたりする際に手助けとなる道具が学習英文法」(はしがき, p. vi)である。この考えを基本に, 第I部 教育英語意味論の方法, 第II部 教育英語意味論の実践を述べる。

2.4 大竹芳夫『談話のことば1 文をつなぐ』(「シリーズ 英文法を解き明かす」第3巻, 研究社, 2016.7.31)

談話を構成する文どうしはさまざまな方法でつながれたり, 場合によっては途切れさせたりする。接続詞などの接続表現は文を「接(つ)ぐ」事象であるのに対し, 沈黙を埋めたり, 直截的表現を緩和したり, 話題転換をするのは「つなぐ」事象である。この視点は, 豊かな「つなぐ」表現に目を向けさせる。文のつなぎ方の諸相(第1章), 話を途切れさせる表現(第2章), 話し手への配慮(第3章), 話題転換・訂正・補完(第4章), 沈黙のつなぎ(第5章), 情報のつなぎ(第6章)などさまざまなものがある。合計60余りの表現が実例とともにあげられている。第7章は結語である。長年の積み重ねからきた熟成を感じさせる研究成果である。

2.5 中山仁^{ひとし}『ことばの基礎1 名詞と代名詞』(「シリーズ 英文法を解き明かす」第1巻, 研究社, 2016.8.31)

第1章「名詞」と第2章「代名詞」からなる。それぞれの章で, 名詞と代名詞に関わる様々な疑問に答える形式になっている。第1章では, 名詞の分類, 単複両扱いになる名詞(audience), 常に複数形で用いられる名詞(trousers), 複数語尾をもたないのに常に複数扱いの名詞(cattle), 語尾が-icsの名詞の単数・複数扱いの区別(politics), 単数扱いの語尾が-sの名詞(measles), 主語と動詞の数の一致, 総称用法,

回顧と展望

所有格と冠詞など、第2章では、単数代名詞の they, one, 疑問代名詞の which, who, what の使い分け、関係代名詞の制限節・非制限節などが詳細に述べられている。幅広い読者の疑問に答える内容である。

2.6 八木克正『斎藤さんの英和中辞典—響きあう日本語と英語を求めて』(岩波書店, 2016.10.25)

本書は、本稿 4.1 にあげた、斎藤秀三郎著・豊田実増補・八木克正校注『熟語本位 英和中辞典 新版』の解説と発展であり、裏話のまとめである。『熟語本位』の校注は簡潔な記述を求められるので、この本の中で校注を敷衍し、校注を記述するまでの調査の過程や、本文の記述の問題点、時に余談をまじえて全体をひとつの読み物にした。第1章『熟語本位』とはどんな辞書か、第2章斎藤と辞書作り、第3章今に生きる『熟語本位』の記述、第4章用例の出典を探る、第5章受験英語の原点、第6章成句・諺の妙、それに、本書の内容を深めるための10項目の関連事項を資料(英和辞典の発音表記の変遷、「ウェブスターの辞書」、斎藤と伝統文法、「正則」とは、OED (NED)・COD などの)の記事を付した。

2.7 ^{くのすずむ}久野 暉・高見健一『謎解きの英文法 動詞』(くろしお出版, 2017.3.27)

シリーズ第9冊目で、言語学的研究の経験豊かな目で、個別の動詞に関わる問題や、相互動詞、中間構文、命令文などのカテゴリーで論じる、合計10章からなる。第1章は help が to 不定詞をとる場合ととらない場合に意味の違いがあるかどうか、第2章は meet, marry, date のような相互動詞には受け身にならないなどの制約があるのはなぜか、第3章は主動詞が動詞句を目的語にとる場合、to 不定詞をとるか動名詞をとるか(あるいは両方とるか)をどのように見分けるか、第4章は scratch the door / scratch at the door のような他動詞構文 / 能動構文の違いについて、第5章は中間構文について、第6章から第8章までは come と go について、第9章は動詞が命令文になるための条件、第10章は promise+O (人)+to do について論じている。その他、4つのコラムも興味ある内容である。

3. 共 著 書

^{こうせい}南出康世・^{ながゆき}赤須薫・^{とうの}井上永幸・^{とうの}投野由紀夫・山田茂(編)『英語辞書をつくる—編集・調査・研究の現場から』(大修館書店, 2016.10.10)

3.1 PART I 編者が語る英語辞書編集

今実際に活用されている英語辞書の編集者4名が、編纂にまつわる事柄をエッセー風にまとめている。執筆者は、1960年代後半以後の新しい辞書発展の時代を引っ張っ

てきた編集者の次の時代を担っている、いわば第二世代の编者である。この第二世代が活躍してきたのは、JACET 英語辞書研究会 (1995-) の隆盛期と英和・和英辞典の隆盛期と重なる。それぞれの創意工夫と辞書記述の改善の努力の軌跡は、熟読に値する。著者名と題名だけを紹介する。

赤須薫「紙の辞書を考える」

井上永幸『ウィズダム英和辞典』

投野由紀夫「データ・サイエンスとユーザーの哲学—4冊の辞書を編纂して」

南出康世「辞書編集の苦労話—『ジーニアス英和辞典』を中心に」

3.2 PART II 学習英英辞典 (EFL 辞書) の調査と研究

3.2.1 山田茂「EFL 辞書：歴史と課題」 EFL 辞書 (外国人学習者のための英英辞典) の歴史と、課題を論じている。課題として、頻度順の弊害、定義語彙、文定義、サインポスト、ネイティブスピーカーの視点をあげる。これらの課題は電子メディアの活用で解決できるだろうという。また、辞書指導の必要性を強調する。

3.2.2 畠山利一「EFL 辞書使用上の注意点—文法情報の読み取りを中心に」 上の論文と同じく EFL 辞書の研究で、COD¹² のような一般英英辞典と比較して EFL 辞書は文法・用法について詳しいが、形容詞の文型表示で it is adj. to do と S is adj. to do が区別されていない、コロケーション表示で品詞の区別がされていない、成句の記述が実態に合わないことを論じる。

3.2.3 川村晶彦「EFL 辞書と語用論—ポライトネスを中心に」 英語コミュニケーション能力向上のためには語用論的能力の育成が必要である。EFL 辞書では語用論的情報がどれほど記述されているか、ポライトネスに絞って論じる。辞書の特性として、特定のコンテキストで起こる語用論的に確立した表現を同定し記述してゆくべきであるという。

3.2.4 磐崎弘貞「EFL 学習者の語彙エラーと辞書情報の活用—高頻度語彙 / 単語バイアスの観点から」 英語辞書の編纂者は英語ネイティブスピーカーの大規模コーパスを使うが、同時に、英語を外国語として学ぶ学習者の犯すエラーを観察し、その実態を辞書編纂に生かす必要があることを、具体例を使って主張している。

3.3 PART III コロケーションと英語辞書

3.3.1 小室夕里「学習英和辞典におけるコロケーション記述の変遷」 過去 10 年の学習英和辞典におけるコーパスを利用したコロケーション記述の変化を分析し、今後さらに、独自のコーパスやデータ処理の開発によって、現在の EFL 辞書にはない日本人英語学習者用のコロケーション記述を期待するという。

3.3.2 赤瀬川史朗「日英双方のコーパスから見たコロケーションと辞書記述への応用」

辞書記述のために英語コーパスだけでなく、日本語コーパスも利用する必要があるとし、「冷たくなる」の意味の V+cold のパターンに出現する動詞の比較(enTenTen 2012 コーパスを使用)と、日本語の「冷える」と「冷める」の比較(筑波ウェブコーパスを使用)を行い、日本の英語辞典の記述に生かす方法を検討している。

3.3.3 鎌倉義士「コロケーションの転移とその対策として学習者に向けた辞書記述」日本には、電車内の注意書きなどいたるところに日本語のコロケーションを直訳したような英語があふれている。日本人はこのような英語をインプットされている可能性がある。「World Englishes を考慮し、学習者コーパスの分析などを通じて日本人が表現したい英語を調べた上で、辞書記述に応用する必要があるだろう」(まとめ)という。

3.3.4 塚本倫久「コロケーションの抽出と辞書記述について」辞書記述のためにコロケーションを抽出するさいの問題点(中心語の前後何語までコロケーションとするか、semantic preference, discourse prosody, span の長いコロケーション、日本の学習者に役立つコロケーションの抽出と記述)を論じている。

4. 辞典

4.1 斎藤秀三郎著・豊田実増補・八木克正校注『熟語本位 英和中辞典』(岩波書店, 2016.10.25)

斎藤による原著『熟語本位 英和中辞典』は1915年、豊田実による増補新版は1936年、同じく豊田実による新增補版は1952年に出た。新增補版に、漢字仮名遣いの修正とルビを加え、詳細な校注を加えたのが本書である。新增補版の漢字仮名遣いを全面的に現代風に改め、詰込み式の書き方を、改行を増やしたりゆったりとした版組に改めることによって読み易くした。用例には必要に応じて出典(あるいは同じ表現を使った文献)や理解を助ける文の構造の解説、使われた単語やフレーズ、難しい日本語の訳語や説明に注をつけた。また、明らかな誤植には訂正の注をつけた。難しい文法用語にも注記を加えた。用例や記述のうち今では古くなったもの、誤解を生じるものについては注を加えた。原著出版から今までの100年間の英語の変化が分かるように、語義や用法について((古))((廃))((方言))などのラベルをつけた。

4.2 Michael Swan, *Practical English Usage*, 4th edition (2016)

第3版(2005)までは、辞書のように、項目がアルファベット順になっていた。4版ではテーマ別の配列になったことが最も大きな違いであろう。テーマは、Verbs, *Be*, *have* and *do*, Present Tenses, Talking about the Future, Past and Perfect Tensesなどの文法項目が28セクション、語彙項目がVocabulary Areas (nationalities, countries and regions / numbers / talking about age / dates など)、Word Formation and Spelling (abbreviations / contractions など)、Word Problems from A to Z の3セクションか

らなる。第3版のようにアルファベット順で調べたければ、索引を引くことになる。

4.3 Jeremy Butterfield (ed.), *Fowler's Dictionary of Modern English Usage*, 4th edition (2015)

本稿執筆者が見過ごしたために、1年遅れたが、やはり重要な語法辞典の改訂であるのでとりあげることにした。第3版(1996)から20年の間に英語も変化したし、記述の表現法も時代のギャップを感じさせる。また、巨大コーパス Oxford English Corpus が利用でき、世界の多様な英語を調べることが可能になった。このような背景をもとに行われた今回の改訂の主眼を、冒頭の“A revision of the twenty-first century”で3点あげている。1. 250項目を加えた (bog, to google, hashtag など), 2. 記述の点検をし、修正を加えた (between you and I [この形である程度確立しているという], hopefully など), 3. 記述方法を時代に合うように改めた。「規範的」と「記述的」については、「記述的」であろうとしたが、Fowler以後歴代の改訂者の伝統を継いで、編者の好みは反映しているという。 (関西学院大学名誉教授)